

仏陀の瞑想と偽幻覚 (Pseudohalluzination)

—F・ハイラーによる瞑想についての精神病理学的見解—

嶋田毅寛

フリードリヒ・ハイラー (Friedrich Heiler, 1892-1965) とはドイツのミュンヘン出身の宗教学者であり、ミュンヘン大学で学位を修得後に 1922 年からはマールブルク大学で神学教授を務めた。そして同大学退官後、ミュンヘン大学員外教授。1967 年ミュンヘンにて没した、第一次大戦と第二次大戦間のワイマール共和制期を代表する宗教学者として知られている。

本研究において触れている『仏教的沈潜——宗教史的探求』¹⁾ とは彼の比較宗教学の著作であり、『仏教的沈潜』の全体を概観するならば、「祈りの宗教」であるキリスト教と「沈潜の宗教」である仏教との比較考察と言える。というのも彼は本著作以前にも、古今東西の資料を収集して、祈りを「類型化」したドイツ宗教学確立期の代表的作品である『祈り』(1917) という著作を残しており、その彼が「祈り (Gebet)」に対応する仏教における宗教現象として「沈潜 (Versenkung)」に着目しているからである。

本稿で取り上げるのは、ハイラーが『仏教的沈潜』において禪定の際に瞑想するものに現れる神々や光といった神秘的現象を「精神病理学的 (psychopathologisch)」には〈偽幻覚 (Pseudohalluzination)〉と捉えられるとしている点である。『仏教的沈潜』の中に「精神病理学」について語っているところは他になく、またハイラーがこの場合「精神病理学」と述べていることに対する具体的な典拠がないため、それがどのような視点によるものかは不明である。そのため本稿においてハイラーがこの場合〈偽幻覚〉ということで、仏陀の瞑想についてどのような見解を持っていたかを可能な限り探ってみることにする。

①ハイラーの言う第四の禪定と超感覚的体験

第四の禪定はその物理的側面について完全に動作の無いものであり、その呼吸はもはや知覚可能ではない。その物理的側面について第四の禪定はあらゆる感覚、気分の滅状態、アパシー (Apathie) であり、観察者は完全な精神的空と均一性の状態のもとに到達する。快と不快を越え、愛と憎から解放され、歓喜と苦に対し関心なく、世界全体、神々、人々、いやそれどころか自己自身に対しても関心なく、僧侶は“sancta indifferntia”、完全なる落ち着きに、涅槃の入り口にとどまる²⁾。

ハイラーは〈禪定〉の四段階について述べており、ここで詳述はせず手短に示す。①第一の禪定は「思慮」の段階、②第二の禪定は歓喜の段階、③第三の禪定は歓喜から落ち着きへの過渡の段階、④第四の禪定は完全なる落ち着き・無関心の段階であるという。上記の引用はその最終段階である禪定についてまとめた記述である。仏陀が悟った後の仏教における最終的真理が〈涅槃〉であり、〈禪定〉はそのときの心的状態であるとハイラーは捉えており、まさに上記にある「第四の禪定はあらゆる感覚、気分の滅状態、アパシー」である。

第四の禪定は純粋に静息的な状態であり、自らへと高まった僧侶は精神の輝きと明晰性に満ち溢れている。四聖諦の認識も純粋精神的に瞑想すること、あらゆる現存在の隠された背景へと照らし出す超感覚的智である。いかなる感覚的観念もこの認識の崇高な精神性を曇らせず、感覚的知覚と直観的幻想の色鮮やかな世界はそう既に第二の禪定以来瞑想することの背後にある。そしてやはり最初は〈捨 (upekkhā)〉の状態の神秘的な精神性と両立しえないように見える奇妙な体験とそれを認めることも第四の禪定の段階へとつながる³⁾。

上記の引用にも分かるように「第四の禪定」は完全に精神的な超感覚的状態であり、もはやそこでは快や苦といった価値判断をも完全に超えている「気分

の滅状態」とでもいうようなものである。そしてここで特に「第四の禪定」に着目する理由は、ハイラーがこれに関して〈偽幻覚〉について言及しているからである。完全に精神的状態であり、「精神病理学的」見解など一見的外れのようにも見られかねないものの、彼は上記の引用にもあるように、完全なる心の平静である〈捨〉の状態と相反するような「奇妙な体験」を認めることが「第四の禪定の段階へとつながる」というのである。それに続けてハイラーは「精神的なものの頂点上で神秘的体験が感覚的なものへと変転するというある種の悲劇的なもの (Tragik)」⁴⁾ について語る。それによると「沈潜において完成される精神が最高の宗教的智を看取した後、再び抑圧された幻想の作用が出現し、感覚的強度と色合いについての観念の像を発生させる」⁵⁾ のだという。ここで「悲劇的なもの」というのは、「第四の禪定」が既に完全なる滅の状態、純粹に静止的な状態であるにもかかわらず、「再び抑圧された幻想の作用が出現」するという、かつて滅却しつつくした状態が再び現れるというような一種の退行現象を示しているのであろうか。そしてその際の「感覚的強度と色合いについての観念の像」がハイラーに言わせると、「精神病理学」を援用すれば〈偽幻覚〉として捉えられるのだという。

筆者は以前に独の哲学者ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) の心理学時代の仏教観についての研究を発表し、そこでこのような仏陀の瞑想における超感覚的体験について彼の著作『精神病理学総論』⁶⁾ を手掛かりに、「それを彼は〈偽幻覚〉と捉えていた」と解釈したことがある⁷⁾。ヤスパースは自身の著作『精神病理学総論』第四版⁸⁾ および『大哲学者たち』における「仏陀論」⁹⁾ においてハイラーの名に言及しているもののその両者の関係は必ずしも明確ではない。『精神病理学総論』第四版において『仏教的沈潜』の書名が取り上げられていることは確かであるが¹⁰⁾、どういう脈絡で参考文献に含められているかは不明であり、『大哲学者たち』に至ってはハイラーの名が記されているだけであり、書名すら記されていない¹¹⁾。そして一方のハイラーにおいてヤスパースに関する言及は、少なくとも『仏教的沈潜』中には見当たらない。そこで次章ではこの〈偽幻覚〉についてヤスパースの『精神病理学総論』を参考にしつつ、この語でもってハイラーが何を意図していたかについて可能な限り解

積を試みるものである。

②意識状態の変革と偽幻覚

『精神病理学総論』において〈妄覚〉(Trugwahrnehmung)という精神現象が指摘されている。これは実際にある対象が異なって知覚される「知覚の異常」と区別され、実際には存在しない対象を誤って知覚してしまうことである¹²⁾。妄覚の一種である〈偽幻覚〉は、「実体性を欠き内的な主観の領域に現象するが、定まった輪郭 (bestimmte Zeichnung) で全て詳細に、感覚要素の完全なる知覚充足性において (in voller Wahrnehmungsadäquatheit der Empfindungselemente) 精神的な目 (geistiges Auge) の前に立つ」¹³⁾ というものであるという。既述した筆者の以前の研究である「心理学時代のヤスパースの仏教観」とは、彼の著作『世界観の心理学』¹⁴⁾ において引用されている仏教学者のベック (Hermann Beckh, 1875-1937) による仏陀の瞑想の記述について、それが心的状態に応じた意識の諸段階であり、その意識状態に現れる神々や世界観のことをヤスパースが〈偽幻覚〉として捉えているという筆者の解釈である。

当然ながらベックはおろか、『世界観の心理学』の作者であるヤスパースがこの箇所について自ら〈偽幻覚〉との関連を言及しているわけではない。ヤスパースによるベックを引用している箇所への見解について、筆者が『世界観の心理学』以前の『精神病理学総論』にあるその用語を適用しているが、ヤスパース自身もその箇所で「精神病理学を通じて知る」¹⁵⁾ としていることを筆者なりに解釈したものである。ただここで注意しなければならないことは、ヤスパースの言う〈偽幻覚〉がある特定の意識状態に対する一種の表象 (Phänomene) であり、必ずしも病的な状態を意味するのではないということである¹⁶⁾。確かにここで言う〈偽幻覚〉については、それが通常の知覚とは異なった心的状態において発生するものでありながら、「長いこと幻覚と取り違えてきたが、よく見ると実物的 (leibhaftig) な知覚ではなく、一種特有の表象であるごときものがあり」、それをヤスパースはカンディンスキーにならって〈偽幻覚〉と記述しているのである¹⁷⁾。

個々の意識領域 (Bewußtseinssphäre) は同時に規定された世界領域 (Weltsphäre) として現れる。「意識段階」 (Bewußtseinsstufe) と「世界」あるいは「世界領域」という概念は仏教において完全に互いの中へ移転し (übergehen) 合い、そして仏陀が見かけ上あまりにも幻想的な仕方ですれぞれ異なった「世界領域」について説いている全てのもは、まさに (引用元の当該箇所) に記述されている) 瞑想的意識 (das meditative Bewußtsein) の経験に関係している¹⁸⁾。

上記の引用はヤスパースが『世界観の心理学』においてベックの『仏教』を引用している箇所であるが、つまり瞑想という特殊な心的状態にはそれに相当する特殊な「世界領域」が開けるというのである。このことからベックが『仏教』において語った、瞑想という特殊な意識状態において現れた光や神々の特徴により、ヤスパースがそれらを特殊な心的状態の表象として、「精神病理学的」に〈偽幻覚〉と捉えていたのではないかとの仮説を筆者は唱えていたのである。それというのも、上記のベックからの引用に続いてヤスパースは、そのような特殊な心的状態が「異常な心的過程」、あるいは「ヒステリーまたは催眠的な暗示」において見られることを指摘している。また『精神病理学総論』においてもそれらに共通して〈妄覚〉の発生が見られ¹⁹⁾、そして〈偽幻覚〉がその妄覚の一種であるとヤスパースは述べている。その〈偽幻覚〉についての言及はハイラーのものとかかなり似ている点が多い。それについては次章において改めて取り上げることにしよう。

③精神病理学的な見解——瞑想と偽幻覚

ヤスパースが特殊な意識段階としてベックの『仏教』における瞑想について触れた際、「それを我々は精神病理学を通じて知る (wir kennen durch die Psychopathologie)」としているが、「精神病理学」という記述のもとに具体的に何を想定していたかは『世界観の心理学』内では定かではなく、〈偽幻覚〉としたのはあくまで筆者の解釈である。一方でハイラーは、第四の禅定につながる神秘体験を「精神病理学」として見られるなら〈偽幻覚〉と捉えられると明

確に認めている。

そして祈りの内に沈潜されたキリスト教の聖者にキリストと神なる父、天使と天の精霊が現れ、そしてそれと語ったように、沈潜において進歩した仏教の托鉢僧侶にも光が還流する天の精類、『神々』が知らされ、彼らと心置きなく対話をする。我々はすぐにここで幻覚について語り、精神病理学を援用しがちである。しかし仏教の神秘主義者は西洋の聖者と同じように確かに、ここでは肉体の目でもって見ること、世俗の耳でもって聞くこと、人間の声でもって語るのではなく、精神的知覚と内的な自己告白が重要であると知っている。したがって我々はこの神秘体験を偽幻覚としてのみ記すことができる²⁰⁾。

そしてヤスパースが『精神病理学総論』において〈偽幻覚〉について触れている箇所を併記してみよう。

「偽幻覚は有体性 (Leibhaftigkeit) を欠き内的な主観の領域に現象するが、定まった輪郭で全て詳細に、感覚要素の完全なる知覚充足性において、精神的な目 (geistiges Auge) の前に立つ」²¹⁾

このように沈潜の内にある僧侶が神々と対話をするような神秘体験が、ハイラーに言わせると「精神病理学」を援用してみれば〈偽幻覚〉であるという。ただここでいう〈偽幻覚〉について内容の出自が示されておらず、あるいは「精神病理学的な意味で言う幻覚 (Halluzination) ではない」という意味で〈偽幻覚〉と記されているとも考えられる。

ここで引用したことの中にはヤスパースが『精神病理学総論』で言う〈偽幻覚〉とかなり重なり合う面が見出される。それは神秘的な視覚と聴覚、そして肉体の目や耳では知覚できず、上述にもあるように「精神的な目の前に立つ」という点である。ハイラーはこの超自然的聴覚について、経典の引用にある「超人間的聴力」を〈神的聴力〉と表し、「世俗の耳でもって聞くこと」ではないとする。一

方でヤスパースの言う偽幻覚について興味深い表現があり、それは「心の中の声 (innere Stimme)」²²⁾ というのでありハイラーの言う「幻覚的知覚に似た内的知覚 (innere Wahrnehmung)」²³⁾ と表現的に近いものがある。ベックにせよハイラーにせよ、瞑想の高まりの段階に応じてそれぞれ異なった神々と、「精神的な目」や「心の中の声」でもって修行僧が対話をするというようなことが述べられており、まさに上に引用したようにヤスパースが〈偽幻覚〉について、「実物性がないこと」「主体の内空間に現れるが、はっきり定まった輪郭があり、細かいところまではっきりしていること」「感覚の要素は知覚に従って精神的な目にうつる」ことというように述べている点と重なり合う面が多々見られる。そしてヤスパースによると偽幻覚は「暗い視野には見えず」²⁴⁾「表象空間の中に見られるので、注意を暗い視野に向けるとそれは消える」²⁵⁾ とされるが、ハイラーも「内的に開明された敬虔さは自己以外を照らし出す光を見る」²⁶⁾ としており、〈偽幻覚〉として解釈される内的な知覚における光がはっきりと示されていると分かる。

とはいえ必ずしもハイラーはここで述べられているような「第四の禪定」の際に現れる神秘的体験を〈偽幻覚〉として完全に「精神病理学」における現象に還元してしまっているのではない。というのもハイラーは、「内的体験は粗雑な魔術じみた仕方 (grob-magischer Weise) で、その仕方が属している心的世界 (seelische Welt) に基づいてのみ表現され、知覚しうる外的世界 (wahrnehmbare Außenwelt) へと投影されている」²⁷⁾ のであって、「内的な像と思想は宗教的体験の力を通じて客観的現象となる」²⁸⁾ と述べている通り、あくまでこの禪定という心的状態を宗教的体験として客観的に表現するために「精神病理学」を援用して〈偽幻覚〉と記述しているに過ぎないことが見て取れる。ハイラーは「精神病理学」について触れている箇所ですぐ続けて、「この独特な現象の核は精神的であり、外的な覆い (äußere Hülle) のみ感覚的であり」²⁹⁾ として、ここでいう神秘的体験が「心の目や神的聴覚」でもってなされるとする一方で、そのような体験が全く人間の身体を隔絶した場においてなされるのではなく、その体験における感覚を自らの内に有している「外的な覆い自体」を否定してはいない。そしてそこに精神病理学的な解釈が成り立つ余地が開けるという意味で、ハイラーが「精神病理学的」との表現を用いたのではないかと筆者は捉え

ている。

このような病理学的解釈のもう一つの可能性がハイラーにより示されている。そこでは『阿含経』の『長部經典 (Digha-nikāya)』における、空中浮遊や月や太陽をつかみ取るなどといったまさに粗雑な魔術じみた仕方での表現が見られる³⁰⁾。これに対してハイラーは、先述した「内的体験は粗雑な魔術じみた仕方では表現され、その魔術じみた仕方が属している心的世界から知覚可能な外的世界へと投影される」ことをその後続けている。ここに記されているまるでファンタジー (Phantasie) 童話のような表現で記されている内容は、魔術じみた仕方が属している「心的世界」の描写が「知覚しうる外的世界」へと投影されることにより、本稿で問題としている〈偽幻覚〉に代表される病理学的現象として評価されるということである。なおここで触れている病理学的現象は、それぞれ異なった肉体及および異なった場に同時に一人の人が滞在するという「病理学的な意識の分裂 (pathologische Bewußtseinspaltung)」であると記されている。そして依然としてここで言われている「病理学的」についても具体的な典拠はないものの、〈偽幻覚〉について語っている先の「精神病理学」と無関係ではないと考えられる。ただこのような現象をわざわざ「(精神) 病理学」と断って記述しており、それがあくまで知覚しうる外的世界に投影されてこそはじめてそのように捉えられることを強調していることが見て取れる。ベックが「唯物論的の思惟は仏教とは無関係であり、したがって世界領域についてもただ霊的なもの (Geistiges) を考えればよいのであって、物質的なもの (Materielles) は全く考えなくてよい」³¹⁾と述べていることとハイラーのここでの態度との相違は、後述するヤスパースに対するのとはまた違った意味で、仏教学者と宗教学者との好対照を示している。

これまで見てきたように、ここで言う「精神病理学」があくまで表現するための方法論ということになり、ハイラーが語る〈偽幻覚〉及びその他の「(精神) 病理学的現象」がますますヤスパースの『精神病理学総論』において触れているような、病理学的に見て一種の表象に分類されるという意味でのそれと同一である可能性が高くなる。ハイラーが本当に『精神病理学総論』から〈偽幻覚〉の着想を得たかまでは定かではないが、少なくとも彼が『仏教的沈潜』で触れ

ている〈偽幻覚〉が精神病理学的な意味で述べられていること自体は十分に考えられることである。

そしてここで特記すべきことは、ハイラーによるベックの引用である。ハイラーは『仏教的沈潜』においてヤスパース以上にベックの『仏教』から多く引用しており、この〈偽幻覚〉について記述している箇所にもベックの引用が散見される。中でもハイラーがそこで触れている「他者の心の認識」(探知の奇跡〈記信示導〉)はベックの『仏教』からの引用であり³²⁾、奇しくもそれはヤスパースが『世界観の心理学』で引用している「瞑想」の章と同一である。もちろんそのような『長部経典』における「他者の心の認識」をまるで超能力であるかのように捉え、「精神病理学的に見て」幻覚か何かの病理学的現象にしてしまうことは可能である。事実ベックはその際に瞑想の修行者が、「汝の思考はこうであり、汝の心情はこうである」³³⁾と述べることができるとしており、あたかも他者の心の中を読み解いている超能力か何かのように語っている。それに対してハイラーはその〈記信示導〉について、「完全な落ち着きの状態で自らの以前の生を見渡すことのできる修行者は、他者の倫理的・宗教的状态を認識し、心の最深の秘密 (tiefste Geheimnisse des Herzens) を明るみに出すという力を持つ」³⁴⁾と述べているように、〈神通力〉というよりは瞑想修行者たちの心理学的・倫理的洞察の高さとして捉えている。

ヤスパースおよびハイラーの両者とも、ベックの『仏教』における「瞑想」の章に高い関心があったことは疑いない。そして前者は自ら精神病理学者・心理学者としてベックの語る仏陀の〈瞑想〉を特殊な意識状態における表象として、後者はベックの語る仏陀の神的視覚・聴力を「精神病理学的」に見て〈偽幻覚〉としつつも、それはあくまで一面的であってそれに尽きないものと評していた。ここに精神病理学・心理学者と宗教学者とのコントラストが見られる。

ここで当初の問題に振り返ってみる。宗教学者であるハイラーは『仏教的沈潜』を通して、キリスト教と仏教との比較を行っており、瞑想により達する心的状態である〈禅定〉における神的視覚・聴力がキリスト教の祈りにも類似の現象があると評している。そしてヤスパースがそれらの「精神病理学」に還元した「内的な視覚・聴覚」である特殊な心的現象を、ハイラーは「精神病理学」

を援用すれば〈偽幻覚〉であるとしつつも、それは両宗教の神秘体験において見られるあくまで感覚的表象を客観的に表現したに過ぎないとする。そのように見てみるとヤスパースと異なり、ハイラーはこのような内的な知覚をあくまで感覚的知覚とは区別しつつ、それらに完全に還元されることはないという態度をとっており、その意味でベックの立場により近いと言える。というのもベックは『仏教』において「近代科学にとって実質的であり実在的であるもの全ては、仏教者にとっては既に第二の瞑想段階において消却されたもの、虚無に墮したもの」³⁵⁾として科学的な意識と瞑想におけるそれとを完全に別個と見なしており、ハイラーも仏陀の瞑想における禅定を「精神病理学的には偽幻覚」としつつも、「感覚的強度は単に精神・神秘主義的体験の強力な付加物に過ぎない」³⁶⁾と述べている通り、偽幻覚として捉えられうる一種の感覚的表象を瞑想における付加物として神秘体験と区別していることから伺える。しかしベックのように完全に別個とするのではなく、またヤスパースのように心的現象にのみ着目して精神病理学的現象に還元させるのでもなく、あくまで客観的に表現するため精神病理学的な概念を援用していることは評価されなければならない。

④まとめ

本稿の執筆を通じて分かったことを手短かにまとめると、①出自がヤスパースからとの確証はないものの〈偽幻覚〉を精神病理学的意味でハイラーは用いており、②仏陀の瞑想についてそれをベックにならって「純粹に精神的現象」としつつも、ハイラーはそれを内に宿している肉体から完全に切り離しえないとし、③瞑想の際に意識される現象は五感的知覚を通して見れば〈偽幻覚〉であるが、それは肉体を持つが故の付随的な現象にすぎず、『世界観の心理学』におけるヤスパースのように「意識変革における現象」＝「偽幻覚」と割り切っているわけではない、④それはキリスト教の祈りの際にも現れる東西の宗教に共通な精神的現象である等、このように併記することができる。特に②と③についてであるが、ハイラーは瞑想における意識を多層的に捉えて、先に記した「(五感による)感覚的強度は単に精神・神秘主義的体験の強力な付加物に過ぎない」とはするものの、それらは〈偽幻覚〉として学的かつ客観的に表現する可

能性を否定していないことに比べ、先に引用したベックの「唯物論的思想は仏教とは無関係であり、世界領域についてもただ靈的なものを考えればよいのであって、物質的なものは全く考えなくてよい」という記述とも差異は明らかである。そしてこのような仏陀の瞑想に対する多層的な見方が、後のヤスパースによる『精神病理学』第四版におけるハイラーの引用につながる手がかりとなるのではないかと構想していると表明することで、本稿を締めくくりたいと思う。

キーワード: 瞑想、偽幻覚、精神病理学的見解、仏陀、ハイラー、ヤスパース、meditation, Pseudohalluzination, psychopathological view, Buddha, Heiler, Jaspers

註

- 1) Friedrich Heiler, *Die Budhistische Versenkung—Eine Religionsgeschichtliche Untersuchung*, Ernst Reinhardt München, 1918.
- 2) *ibid.*, S, 23.
- 3) *ibid.*, S, 33.
- 4) *ibid.*
- 5) *ibid.*
- 6) Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, Springer, Berlin, 1913.
- 7) 拙稿「『世界観の心理学』におけるヤスパースの仏教観」、『コムニカチオン』第24号。
- 8) Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, 4völlig neu bearbeitete Aufl, Springer, Berlin, 1946.
- 9) Karl Jaspers, *Die großen Philosophen*, Piper, München, 1957.
- 10) *Allgemeine Psychopathologie*, 4völlig neu bearbeitete Aufl, S, 611.
- 11) *Die grossen Philosophen*, S, 133.
- 12) <妄覚> は本来『精神病理学総論』における「異常心的生の要素 (die Elemente des abnormen Seelenlebens)」の章に見出される症例であるが、「暗示 (Suggestion)」

の章で催眠やヒステリーにおいても現れると記されている。

- 13) *Allgemeine Psychopathologie*, S, 36-37.
- 14) Karl Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, Springer, Berlin, 1919: 6.Aufl., 1971.
- 15) *ibid.*, S, 192.
- 16) 総田純次著『精神病理学の認識論的基礎——解釈学的立場からのアプローチ』(晃洋書房、2003年) 45頁において、「ヤスパース自身の寄与の例としては、『有体性』と『実体性』を区別することで、カンディンスキーの幻覚体験の自己叙述に基づきつつ、有体性を欠きそれゆえ表象に分類されるべき偽幻覚と、近くに分類されるべき真性幻覚とを区別した仕事を挙げることができる」との記述が見られる。
- 17) *Allgemeine Psychopathologie*, S, 34.
- 18) *Psychologie der Weltanschauungen*, S, 192, ; Hermann Bechk, *Buddha und Seine Lehre*, G. J. Göschen'sche Verlagshandlung G. m. b. H., Berlin / Leipzig, 1916, S, 172. (括弧内筆者挿入)
- 19) 『精神病理学総論』において、「催眠 (Hypnose) はヒステリー (Hysterie) とは異なった何か別物である。その区別は、催眠的現象の構造が特殊な一時的条件により引き起こされる (のに対して)、ヒステリー現象のそれは多くの人間の精神的構造の持続的な特徴である (括弧内筆者挿入)」とあり (*Allgemeine Psychopathologie*, S, 167)、前者が外的または偶然的であるのに対して、後者が内的またはその人間に備わった性質であると読み取れる。
- 20) *Die Buddhistische Versenkung*, S, 34.
- 21) *Allgemeine Psychopathologie*, S, 35.
- 22) *ibid.*, S, 39.
- 23) *Die Buddhistische Versenkung*, S, 33.
- 24) *Allgemeine Psychopathologie*, S, 35.
- 25) *ibid.*, S, 37.
- 26) *Die Buddhistische Versenkung*, S, 34.
- 27) *ibid.*, S, 35.
- 28) *ibid.*, S, 34.

- 29) *ibid.*
- 30) *ibid.*, S, 35.
- 31) *Buddha und Seine Lehre*, S, 173.
- 32) *ibid.*, S, 191.
- 33) *ibid.*
- 34) *Die Budhistische Versenkung*, S, 34.
- 35) *Buddha und Seine Lehre*, S, 172.
- 36) *Die Budhistische Versenkung*, S, 34.